

## 概要「聞き取りと民具から見る七島藺」

シットウ(七島藺)はカヤツリ草の仲間で、そのため茎の断面は三角形です。非常に背が高くなる植物で、畳表に加工されてきました。七島藺を用いた畳表はアオムシロ(青筵)と呼ばれました。17世紀の中頃にトカラ列島から大変な苦勞をして豊後国(現在の大分県)に苗が持ち帰られ、現在の杵築市や国東市、日出町、大分市などで次第に七島藺が栽培されるようになりました。そのため、七島藺は豊後(現在の大分県)特産の工芸作物となり、その製品であるアオムシロ(青筵・七島表)は全国各地に移出されるようになりました。

昭和30年代には七島藺は国東半島を中心に1500haの田畑で栽培され、青筵は500万枚生産されていました。しかし、農業を取り巻く環境や生活様式の変化によって、七島藺の栽培は急速に衰えてしまいました。

この調査報告の前半は「聞き取りから見る七島藺」です。昭和30年(1955)頃に七島藺に深く関わっていた14名の方々から話をお聞きし、その方の人生の中で七島藺とどのように関わってこられたかをまとめました。国東半島を中心に、大分市でも七島藺と青筵の話をお聞かしています。

七島藺を栽培して青筵を編んでいた農家の方からは、七島藺栽培の工程とその苦勞、青筵製造の方法などを聞くことができました。仲買人の方には青筵の買い付けと問屋への納品について話を聞くことができました。青筵問屋の方からは集荷方法、商品としての青筵の仕立て方、運搬・販売方法などを聞くことができました。束にした青筵に問屋や品質の表示のために押すケバン(毛判・問屋印判)や、墨書きをするための太い筆など、青筵問屋独特の道具の話もありました。地元の畳屋さんから、イグサ(藺草)の畳と青筵の畳との製作上の違いなどの話を聞いています。また、織機製作所の方からは、あおむしろおりき青筵織機がじばた地機から

あしぶみしきむしろておりき足踏式筵手織機(足踏製筵機)、はんじどうせいえんき半自動製筵機へと進化していった経緯と、織機についてさまざまな話を聞くことができました。

青筵は丈夫な畳表ですが、そのまま織るイグサと違って、縦にふたつに裂いた七島藺を用いるため、まっすぐ織機の中に入れにくく、全自動製筵機の開発は遅れています。

報告の後半は「民具から見る七島藺」です。七島藺関係民具の最も良くまとまったコレクションは、杵築市教育委員会が所蔵しているものであることが分かりました。そのコレクションは、きつき城下町資料館と杵築市立民俗資料館に収蔵されて展示されています。また、大分県七島イ振興会でも数は少ないですが、一貫した資料が所蔵されています。

これらのコレクションの七島藺関係民具を、用途ごとに「七島藺の栽培と調製」「七島表の織機」「イチビの栽培と調製」「七島表の流通」に分けて紹介しています。機能向上と省力化を求めて、次第に工夫が加えられていくことがわかります。

最後に、農学者おおくらながつね大蔵永常の『こうえきこくさんこう公益国産考』に記された七島藺関係民具を紹介し、現在残されている七島藺関係民具との比較をしています。大蔵永常は近世の偉大な農学者で、日田の出身です。大蔵永常の最後の著作で、集大成的な意味をもつ『公益国産考』の中で、彼は特色ある工芸作物の栽培を奨励して特産品化してゆけば、農家は豊かになると主張しています。これは、きびしい環境にある農林水産物の振興を考える上で、現代でも通じる

考え方であろうと思います。

この調査報告によって、七島蘭と青筵の復活の一助になれば幸いです。